

『漢委奴国王』金印・誕生時空論 鈴木勉著（雄山閣・2940円）技術史を通して定説に挑む 評者 三浦佑之（立正大教授）

東京新聞 2010.06.27 朝刊 10頁 読書2面（全834字）

人文科学でも自然科学でも同じだろうが、いかに脆弱（ぜいじゃく）な根拠の上に組み立てられた学説でも、その筋の権威がお墨付きを与え定説として認知されると、それを覆すのは至難の業となる。そこに公的な後ろ盾、経済的な利権、土地の名誉などが絡まると、定説の位置はますます盤石となり、異を唱えても笑われ無視されるしかなくなる。

本書は、もっとも有名で厄介な国宝「漢委奴国王」が誕生した時空「いつ、どこで」を、金属工芸、金属印章、金石文などの研究法を駆使して技術史の面から追究した画期的な著作である。

一七八四（天明四）年に福岡市志賀島から掘り出されたという金印は、発見当初から疑いの目が向けられたにもかかわらず、近代になると、戦前も戦後も日本国の起源にかかわる第一級の国宝として遇されてきた。そこには、黒田藩に秘蔵されていたという政治的・社会的な事情、権威ある学者の発言、真偽を検証しようとしぬ考古学界・歴史学界の旧弊な体質があった。加えて一九八一年、中国で見つかった金印「廣陵王璽（こうりょうおうじ）」が、日本の金印と工房まで同一とみなされ、その真正を保証する切り札になった。

彫り方や工具などの技術史を通して権威や定説に立ち向かう本書を読んで真っ先に感じたのは、科学であるべき学問がいかにあいまいな根拠と粗雑な論理に基づいて成り立っているかという点である。ただし、自然科学系の研究者である著者は金印が作られた時空について安易な結論を導こうとはしていない。本書を貫くのは、冷徹な観察眼であり、マトリックス図を用いた冷静な分析である。それゆえに重い。

金印を疑う評者としては、よくぞここまでと感心したが、通説を墨守する人々にはきわめて深刻な事実が突きつけられている。「廣陵王璽」さえもが疑わしいというのだから、沈黙は金ではすまされない。さて、考古学界はどう反応するか。

すずき・つとむ 1949年生まれ。工芸文化研究所理事長・檀原考古学研究所研究員。著書に『古代の技』『復元七支刀』など。

中日新聞社

本サービスにおける著作権および一切の権利は株式会社ジー・サーチまたはその情報提供社に帰属します。
本サービスの出力結果を複製、複写、出版、販売または第三者に対し配布することは禁止されています。